田峯観音野舞台の小屋掛け構法について

三河地域における伝統的竹造建築構法の研究 その2

CONSTRUCTION OF BAMBOO TEMPORARY THEATER ATTACHED TO THE RURAL KABUKI STAGE AT DAMINE KANNON TEMPLE

A study of construction of traditional bamboo architecture in Eastern Aichi Part 2

泉田英雄 —— * 1

キーワード：
竹, 農村舞台, 小屋掛け, 仮設建築, 建築構法, 吊り構法

Keywords :
Bamboo, Rural kabuki stage, Temporary building, Building construction, Suspension structure

Hideo IZUMIDA —— * 1

A temporary theater has been constructed by the villagers for the New Year Rite of Damine Kannon Temple using bamboo and Hinoki logs since the end of Edo Period. This article surveys the building construction system and construction process. Bamboo construction easily sags down as time goes by although the theater roof must be maintained in a certain height. Estimating the sagging, the villagers has devised the suspending structure by balanced Hinoki logs. The theater is really instant building as it is easily built by a several hours and dismantled soon after the rite.

1. はじめに

本稿は、愛知県設楽町の田峯観音高勝寺(通称田峯観音)の農村歌舞伎舞台(以降、野舞台)に付属して建設される見物席を取り上げ、この伝統的竹造建築の構法と特徴を解明し、その可能性を探ることを目的とする¹⁾。野舞台については、農村芸能の急激な消滅に対する危機を背景として、1960年代に全国的に調査が行われたことがあった²⁾。その調査報告書の中で、全国の中で三河地域は野舞台の集中地域の一つに数えられ、特に奥三河では当時でも盛んに農村歌舞伎(以下、地狂言)が演じられていた。最近行われた愛知県近代化遺産総合調査(2002-2004)及び愛知県近代和風建築調査(2005-2006)では、地元民による地狂言は消滅しても、未だ多くの野舞台が残されていることが分かっている。

本研究その1で取り上げた音羽町赤坂地区の杉森神社野舞台を始め、野舞台のいくつかは地域文化財として修理保存され、さらに地狂言の復活の機運も高まってきている。一方、設楽町田峯観音(図1)では室町時代末期から絶えることなく新年大祭が催され、また17世紀半ばからは大祭の後に地狂言も奉納されている。そのための舞台も備えられ、江戸時代には儉約令により組立形式にしなければならないこともあったが、江戸末期の1863年(文久3)には現在の常設舞台が作られた(写真1)。地狂言の舞台が常設されると、上演に合わせて花道や棧敷なども作られ、さらに観客を雪や寒さから守るために小屋掛けも行われていたに違いない。このように、田峯観音では数日間の使用のために140年以上も小屋掛けが続けられてきており、これまで見落とされてきた民俗的建築技術を解明するという学術的意義

図1 田峯観音の周辺地図と小屋掛け予定地

写真1 田峯観音の野舞台 江戸時代末期建設 左手に石垣が見える

*1 豊橋技術科学大学建設工学系 准教授・博士(工学)
(〒441-8122 豊橋市天伯町字雲雀ヶ丘1-1)

*1 Assoc. Prof., Department of Architecture and Civil Engineering Toyohashi University of Technology, Dr. Eng.

写真2 小屋掛けの外観 全体をビニールシートで覆う

だけではなく、これまで私たちは竹を建築にどのように使い、さらに竹にどのような可能性があるのか探してみたいと考えている³⁾。調査は田峯地区住民の許可と協力を得て、2006年12月20日から2007年2月16日まで住民による建設過程を観察調査し、また建物の実測調査を実施し、さらに古老からかつての施工との違いなどを聞き取り調査した。

2. 田峯観音野舞台と小屋掛けの概要

田峯は愛知県東部を流れる豊川の上流に位置し、古来より信濃と三河を結ぶ経済と戦略上の要所であった。室町中期、菅沼定成がここに居館を定め、二代城主菅沼定信は豊川を見下ろす高台に山城を築き、またその鎮守として背後の高台に観音堂を建立した。これは田峯観音高勝寺と名付けられ、三代城主定忠は1559年(永禄2)に新年に田楽祭を奉納することにした。この田楽は、奥三河の鳳来寺田楽と黒沢田楽とともに、1978年に重要無形民俗文化財に指定された。

大祭の翌日、1655年(明暦元)には地狂言も演じられるようになり、この頃最初の舞台が建設された。観音堂の手前には高さ約1mの石垣があり、かつては南東に下る緩やかな斜面になっており、そこを平らに削り、幅30m、奥行き20mほどの小さな広場を造成したことがわかる。この地形の制約から東端を舞台の位置とし、最初は組立式のものであったらしい。18世紀半ば(宝暦年間)に固定式に建て替えられたが、天保年間には儉約令などにより再び組立式にしなければならなかった。幕府の規制が緩む1863年になって固定式になり、これが現在の舞台である。寄棟茅葺きの建物の内部には廻り舞台と三つの迫り上げがあり、彫刻の施された虹梁が正面を飾り、そのすぐれた文化的価値により1978年に愛知県有形民俗文化財に指定された。

この常設の舞台以外に、地狂言上演直前になると代官をはじめとするお歴々のために桟敷などが作られ、また舞台に付属する花道などの装置が設けられ、さらに厳冬の時期にかつては2日間も上演していたことから竹による小屋掛けが行われていた。地狂言上演期間中は観音堂への参道をふさぐことになり、幅15m、奥行き17mほどの規模を持つ小屋掛けは短時間で建設、解体されなければならなかった。そこでは、地元民は慣れ親しんできた技術、材料、道具を用いもく

写真3 小屋掛けの檜丸太 跳ね木用は長さ14mにも及ぶ

もくと作業を行い、構造や手順に関する

各組の小屋掛け担当箇所			
花道・大囲い	梨野程野組・竹桑田組		
櫓	南1組・南2組・竹島組		
寺桟敷・つんぼ桟敷・庶務	北組・鍛冶沢組		

今年の小屋くだき当番の組		
梨野程野組	北組	鍛冶沢組

写真4 組分けの掲示

写真5 小屋掛けの道具、鋸と鉋

手引きもなく、また指揮する者もない。そのため、何かの拍子に形態や構法に変化が生じた可能性もあり、本稿は2007年の建設記録を基にしていることを断っておく(写真2)。

3. 建設の準備

大祭の田楽は例年2月11日(旧暦1月17日)に、そして地狂言は翌日に催される。12月には舞台班と小屋掛け班が決められ、それぞれ資材と作業日程の確認が行われる。小屋掛け班は12月中に必要な本数の竹を用意し、また軸組と跳ね木⁴⁾となる檜丸太は前年からの不足分を追加する。かつては各世帯が真竹を2本づつ持ち寄ることになっていたが、1970年頃から代表者たちが近くの竹林から必要本数を切り出すようになったという。直径8〜10cm、長さ9mほどの真竹、約200本を境内片隅にむしろをかけて保管しておく。

軸組材料は檜丸太で、柱材に元口15cm、長さ4〜5mのものが、また桁材(ナルと呼ばれている)には同じぐらいの太さの長さ8m前後のものが用いられる。これ以外に、元口20〜25cm、長さ10mを越えるものが10本近くあり、これらは跳ね木として使われる(写真3)。この跳ね木に田峯の小屋掛けの構造的特徴がある。

小屋掛けは、1970年からは1日上演となったためにこの日だけ使用されるが、桟敷、花道、覆いを除いて1週間前に完成させておく。現在、田峯地区は7組から構成され、それぞれ15世帯ほどである。上演1週間前を建設日と決め、その朝、各世帯から一人ずつ広場に参加し、組ごとの細かい作業分担が決められる(写真4)。軸組と竹組は力仕事や高所作業が伴うため、組を超えた男性たちが自発的に率先して担う。皆、山仕事用の鉋と鋸を腰に結び付け(写真5)、この道具と縄ですべての作業を成し遂げる。

写真6 跳ね木をワッカで支柱に固定する仕組み

4. 軸組

小屋掛け用地の中央を観音堂への参道が通っているため、小屋掛けの南北の両側面に仮出入口を設けて、工事期間でも参拝者が通れるようにしている。正式の出入口は舞台の向かいの西側面にあり、中には幅11m、奥行き14m、高さ3mほどの大きさの空間が広がる。平座だけで300人ぐらい収容できそうで、かつては家族人数が多かったため、このくらいのスペースが必要だったのであろう。このコの字型平面の廻りに2列に檜丸太柱を配置し、そこを栈敷とするとともに、屋根を支える軸組構造体としている。栈敷幅は南側で1.8m、西側で2.1m、北側で2.4mであり、北側栈敷の舞台寄り部分は花道栈敷と裏花道として使われる(図2)。

柱位置には丸太直径より少し大きなビニールパイプが埋められており、中に詰まった小石を取り出してそこに丸太を挿し込み、楔を施す。かつては、毎年縄張を行い、凍結した地面をツルハシで掘って丸太を埋めたという。舞台を囲むように二重に丸太を立て、藁縄を用いて相互を桁で結んでゆく。内側列柱の約3.0mの高さに桁が水平に架けられ、外側のものはこれより40cmほど低い。この段差の間に竹を差し入れ、向かい側から伸びてきた竹と中央で重ね合わせると、緩いアーチを形作る。この両者の段差は明確な数字でなく、例年おおよそそのところで決められているという。軸組に筋交いを取付け、ここまでで1時間ぐらいしか時間を要していない。

5. 屋根

天井はヴォールト型をしており、その骨組みは竹を格子状に編んで作り、上にビニールシートをかけている(図3)。1970年頃までは各戸が筵を1枚持ち寄り、それで屋根と側面を覆っていた。筵は水分を吸収し重くなり、その当時の屋根重量はビニールシートの屋根に比べると随分と大きかった。そのためか、ヴォールト型の竹組が自重と覆いの重量を支えるのではなく、竹組の上に南・北・西の3方向からかけられた跳ね木によって吊られている。上から見ると、肋骨のようにビニールシートの上に出ているのがそれである。

竹組と跳ね木はそれぞれ別のグループによって組み上げられ、竹組を吊るために跳ね木の方を早めに完成させる。短辺方向の跳ね木の取付けが大仕事で、天秤のように支柱を支点にして外側に重しをかけ、内側を下に押さえながら、両側から伸びてきた檜丸太を重ね合わせる。支点となる丸太の上端は谷型に切っておき、ここに跳ね木がずれないように収め、竹によるワッカで緩く固定する(写真6)。跳ね木は15°ほどの角度で上向くように仮固定し、この状態では外側の重しは地面に着いている(写真7)。現在はコンクリートの固まりをワイヤで吊っているが、かつてはもっこに玉石を積んで、それを薦で吊っていた。両側の丸太が跳ね木として結び合わされると中央が押し下げられるので(写真8)、外端に架けられた重しが地面から浮いてくる(写真9)。若い檜丸太は強い靱性を持ち、下からロープで引き下げながら重ね合わせ部分を荒縄で結束する。

竹組はコの字型平面の南・北・西の3側面から同時に行われ、段差のある二列の桁の間に35cmほどの間隔で並べ、それらを格子状に

写真7 跳ね木の架け渡し

写真8 跳ね木の結束作業 下からロープで引き下げている

写真9 跳ね木外端の重し

写真10 舞台軒下での竹組の固定

写真11 屋根の完成 重しを加減して終了

縄で結び合わせる。舞台側では、舞台軒下に金物が取り付けられており、それで竹組を支えている(写真10)。このようにすると、舞台側の竹組が垂れ下がることはなく、見物席から美しい虹梁がくっきりと浮かび上がって見えることになる。4方向からの竹がおおよそ等間隔で配置され、相互に結束され、そして両側から延びてきたものは重ね合わされる。前稿の杉森八幡社の小屋掛けでもそうであったように、隅部で丸竹を曲面に編むのは無理があり、出入口側の桟敷両端の竹は折れてしまった。それでも木材と違い簡単には剪断しないので、体勢に影響はない(写真11)。竹組は適宜跳ね木から縄で吊り上げられ、全体でゆったりとした曲線を描くようにする。ここまでの作業を、住民40人ほどで朝からたった3時間半で成し遂げる(写真12)。

2月11日の大祭の日には、田楽奉納が行われている傍らで小屋掛け班が再度集まり、シート掛けと内部の飾り付けを行う。現在では、軽量のビニールシートを使うので覆いの重みで屋根が沈下することはほとんどないが、そうなった場合は地面から浮いている重しに砂袋で加重して跳ね木の上向き張力を高める。また、簾で屋根を覆っていた1970年頃まで、跳ね木と竹組の間は30cm以上も空いていたと言われ、跳ね木により大きな張力をかけていたのであろう。

夕方までですべての作業が完了し、翌日地狂言はスケジュール通り無事に執り行われた(写真13)。

6. 解体

2月13日朝8時、小屋くだき当番30人ほどが中心となり小屋掛けの解体が始まる。まず、シートを撤去し、次に跳ね木の外端に掛かっている重しを取り外す。次いで跳ね木の結びをすべて切り離し、それを外に運び出す(写真14)。この作業は跳ね木に大きな張力が掛かっているため、慎重に行う。すると、竹組が中央に向かって少し垂れ下がり、続いて外側の桁を竹組から切り離すと、竹組はがたと中央地面近くまで垂れ下がる(写真15)。こうすると地上から竹を結んでいる縄を切ることができ、作業が非常に楽になる。

この解体作業は2時間ほどで終わったが、かつてはもっと短時間で済んでいたという。その手順とは、跳ね木からすべての重しを外し、まだ跳ね木が水平近くになっている状態で、竹組の吊り縄を徐々に切り離していった。その最後の一本を切ると、竹組が一気に地面に垂れ下がり、これが「小屋くだき」と呼ばれる所以になったといわれる。しかし、竹や檜丸太の跳ね返りが危険なため、最近、跳ね木を最初に撤去する方法に改められた。竹材は各世帯に引き取られ、各種作業用や加工用に使われることになる。

7. 考察とまとめ

前稿その1で紹介した音羽町の杉森八幡社小屋掛けと同じように、竹も跳ね木も時間とともに曲げ耐力を失い、また各部の結束が緩み、さらに覆いが被さるとその重みで屋根全体が垂れ下がってくる。田峯の場合、前述したように、かつては簾で覆っていたのでそれはビニールシートよりずっと重く、また積雪の危険性があり、沈

写真12 竹組の完成 舞台上の虹梁がアーチ型の中に浮かぶ

写真13 地狂言の上演

写真14 小屋掛けの解体 跳ね木を取り外したところ

写真15 小屋組の解体 外桁を外したところ